

第13回 寄せ場釜ヶ崎が映しだすもの

小柳 伸顕（釜ヶ崎キリスト教協友会、
日本キリスト教団牧師）

2009年11月21日



寄せ場釜ヶ崎が映しだすもの

早川 皆さん、今晩は。時間になりましたので、ただいまより第十三回名田庄多聞の会の開催いたします。今夜は、そこにありますように、「寄せ場釜ヶ崎が映しだすもの」と題して、釜ヶ崎キリスト教協友会、日本キリスト教団牧師の小柳伸顕さんよりお話を伺います。小柳さんに来ていただいたいきさつを簡単に紹介します。今年は、貧困や格差社会のことを名田庄多聞の会のひとつのテーマにしようと決めていましたので、私の大学時代からの古い友人に、関西でこのようなことに取り組んでいられる方はいないだろうかと相談したところ、本日来ていただいた小柳さんを紹介してもらった次第です。案内にもありましたように、小柳さんは釜ヶ崎と長い間関わって来られました。なかなか厳しい話になるかとも思いますが、お話しを聞くのを楽しみにしています。それでは、小柳さん、よろしくお願いいたします。

小柳 ただいま紹介していただきました小柳です。先ほど早川さんから話があつたような次第でここに参りました。最初に自己紹介をしたほうがいいということでしたので、自己紹介をさせていただきます。

私が生まれたのは北海道です。最近では北海道と言わないことになっているのです。何でかというところ、アイヌモシリという「人間の住む静かな土地」という意味ですが、アイヌモシリの、その三世とあえて言っています。なぜ三世というかというところ、私のお祖父さんは、それこそ食べぱぐられて北海道に出稼ぎに行つたんです。北海道は大きな藩が、伊達藩だ

とか徳川藩だとかの大きな藩が行つたんですけれど、うちのお祖父さんはそうではなくて、一人で北海道に行つたら何とか食べるだろうという形で行つて、父親がそこで生まれて、僕が三代目ということ、最近ではアイヌモシリ三世と、在日三世ではありませんが、そう言っています。生まれたのは一九三七年ですから、今年の十月で七十二歳になります。戦争も小学校のときに釧路で経験しております。父親も母親もキリスト教徒であつたということもあつて、京都の同志社大学で神学、キリスト教の勉強をしました。今日はキリスト教の話は一切いたしませんけれども、それから社会に出て、キリスト教の牧師ということでもなく、教育ということをもう一度考え直そうということ、そのときは結婚もして子どももいましたが、学校に入り直して、教育学、特に社会教育学を勉強しようとして勉強し直したのです。その後、実は、一九六八年から今日に至るまで、「寄せ場釜ヶ崎」という所と関わって生きてきました。そこでであつたことをここでお話しします。

寄せ場釜ヶ崎

「寄せ場」という言葉は余り聞きなれない言葉です、それから「釜ヶ崎」という言葉も、今は行政上はありません。大阪市は釜ヶ崎とは言いませんし、マスコミもあいりん地区という。「あいりん」もどういう字を書くかというところ、むかしは「愛隣」と書いたのですが、どうも大阪市のほうが恥ずかしくなつて、愛も隣りもないということ、ひらかなで

「あいりん」と書いていますが、聞いた人は何かさっぱり分からないと思いますけれど。あいりん地区という所で、いろんな形で生きて今日まで参りました。

「寄せ場」というのは、日雇い労働者が集まってくる所、昔は「人足寄せ場」という言葉がありましたけれど、働くために集まってくる所です。それが日本には、東から言うくと、東京の山谷、横浜の寿町、名古屋に笹島というのがあつて、大阪が釜ヶ崎で、九州に博多。そういういくつかの流れがあつて、その中で釜ヶ崎は人口が一番多かったときは四万人ぐらいでした。そのほとんどが日雇い労働者、しかも一時期は港灣労働者、いわゆる沖仲仕ですが、船が機械化するとあぶれた人が陸に上がつて建設労働をするという形で、私が行き始めた一九六〇年代からは岡で働く人が多くなつたと思います。一番多く集まつた人たちは炭鉱の失業者でした。一九六〇年代、どこでもそうだと思いますが、炭鉱の失業者が集まつていたのが寄せ場釜ヶ崎の状態でした。私はそのころに釜ヶ崎に関わりました。三つの時期に分けてお話をしたいと思いますので、最初に小見出しのようなを申し上げておきます。

第一段。私が釜ヶ崎と関わつたのは大阪市の教育委員会の囑託として、学校のケースワーカーとして一九六八年から七五年まで七年間働きました。この内容については、簡単に言うと、ケースワーカーというのはご存知のように、教員として働くのでなくて、子どもたちが生活できるような基礎を作る、そういう仕事をしました。たとえば、学校に行つてない子どもたちが何で行けていないかと調べたら、住民票がない

から、就学の通知が来ない。そういう子どもたちを見つけて、その住民票を作るとか、あるいは生活が困難だという場合は生活保護の手続きをするとか、そういう仕事を七年間続けました。

そのあとはずね、第二段というのは、その子どもたちの親たちと会つて、いわゆる日雇い労働者と会つて、その人たちが抱えているいろんな問題を自分の問題にしようという事で、一九七五年から九二年まで、あるグループに支えられながら、その専任者として活動しました。一九九二年には若い世代と交代して、その後の第三段はボランティアとしていろんなことをしてきました。そういう三つの時期についてお話をし、釜ヶ崎というのは何を社会に訴えているのか、それがお話できたらと思っています。

二〇〇人の不就学児

先ほど申し上げましたように、第一段ですが、そのときの学校の名前は、「あいりん小中学校」です。一九六一年に釜ヶ崎で暴動が起つたのです。どんなことかと言うと、労働者がタクシーにはねられた。普通でしたら警察官は救急車を呼んでタクシーにはねられた人を病院に運ぶのが原則だと思いますが、労働者が見ている前で警察官が何をしたかと言うと、まだ生きているのにその労働者にムシロをかけた。ムシロをかけたというのは日本では死んだということですが、みんな生きているのを知っている。まず十分以上現場検証をして、それから救急車を呼

んだ。それで見ていた労働者が怒り出して暴動に発展していったのです。そのときに言った言葉が何かというと、「アンコかて人間や」と。アンコという魚がいますが、俺たちは海底に口をあけて待っている、それかと。日雇い労働者だって人間だという叫びです。そういうことで暴動が起こった。それが一九六一年の八月です。

なぜこの話をしたかというのと、その前年の一九六〇年に大阪市の教育委員会ではなくて、こともあろうに西成にある警察署の防犯係が、学校に行つてない子どもたちが、一当時その地域には四万人ほど労働者とその家族が生活していたのですが、その中で学校に行つてない子どもたちが、どれくらいいたか調べたら、なんと二百人もいた。未就学児、不就学児がそれくらいいた。警察官がなぜそのような調査をしたかというのと、学校に行つてないのは一般的に非行少年だと。その対策を教育委員会などに言ったのですけれど、あるいは地域の学校にも言ったのですけれど、学校はそんな子どもたちは入れられない。一平方キロくらいの所に、中学校がひとつと、小学校が三つあったのです。でも、どの学校も、中学校も小学校も、子どもたちを受け入れなかった。ですから二百人の子どもたちは学校に行かずに、昼間から公園とかいろんな所で遊んでいたし、悪いこともしていた。それで業を煮やした警察が非行少年対策ということで調べたら、二百人もいた。「地域の学校に子どもたちを入れてください」と働きかけたけれど受け入れられなかった。それが六〇年です。

六一年に暴動が起こったときに、いろんな対策をしたのですけれど、

そのときに初めて、この二百人の子どもたちのことも、地域として取り上げて欲しいという声が地域から上がってきて、仕方がないから、ある小学校と中学校の分校として学校ができた。それが「あいりん小中学校」の前身です。そこで、先ほども言いました学校に行つてない子どもたちを教える傍ら、なぜ子どもたちが学校に行けなかったかを調べていったら、先ほど言ったように、戸籍がないとか住民票がないとか貧しくていけないとか分かった。それで、義務教育ですから、あいりん小中学校を大阪市がやつと作った。作ったのはいいですけど、校舎を建てなかった。一番最初プレハブでやった。これ、義務教育ですよ。十二年間校舎がでなかつた。釜ヶ崎にいる日雇い労働者の子どもたちは、別に校舎を建てて学校に入れることはない、というのが当時の大阪市でした。今のこの建物よりももう少し狭いですけれど、当時民生局がもっていた会館の四階と五階を借りて、部屋をふたつに仕切つて、向こうで音楽をやりにこちらで国語をやるといふような、しかも複式の学級をやつて、百人くらいの子どもたちで学校が始まった。

スクールケースワーカーの仕事

その子どもたちの生活あるいは就籍を支援するというところでケースワーカーが初代からいたのですが、六二年からその学校が始まるのですけれど、三代目の人が辞めて、次のケースワーカーを探しているというのを言われて、私がそこに行つたのです。行きましたが、学校でい

いわゆる社会福祉の勉強をしてケースワーカーになったのではなくて、知人にもかく行って校長と面接してと言われて始めたのです。四月の末に校長に会いに行ったら来てくださいと言われ、五月の一日から学校に出勤しました。そして、一番最初の仕事は、「誰君と誰君が今日は欠席だから、行って子どもたちを学校に連れて来てください」ということでした。確かに〇・六平方キロですが、僕は初めて行って、どこになんという建物があつて、何階に誰が住んでいるか分からなくて、そこから仕事は始まりました。びっくりしたといえ、びっくりしましたが、そういう形で私は釜ヶ崎とかかわりが始まりました。キリスト教だからなんか使命をもつて行ったかという何の使命もない。ともかく行って、アパートに名札も付いていないのです。あの辺だと言われていくと行く、隣の家だと怒られて、「うちには子どもなんかいない」と怒られ、朝子どもを三人なら三人迎えに行くのに右往左往したのです。このように釜ヶ崎の子どもたちと関係が始まったのです。

ずっとやっていくうちに、子どもたちが学校に行けないというのは、基本的に貧困のせいだというのが分かったのです。たとえば、お産をするけれど病院の費用が払えないからというので夜逃げをする。すると出生届けが出せなくなる。出生届けがなければ戸籍がないということ、周りの人たちが不思議に思つても、区役所から学校に行つてくださというような連絡は来ない。仕事をやっている中でその病院を探して、ここで確かに生まれたという出生証明を取つて戸籍を作つた子どもたちが何人かいます。あるいは、家族で飯場を転々として、お父さんがど

こそこの山の中だとか転々として、そこで出産して、助産師さんから証明をもらえないままに次の所に行つたというようなきには、そのお助産師さんを探して、確かにこの子は私が取り上げましたと証明をもつたりして、子どもが教育を受けられるような条件を作るお手伝いを七年間しました。

子どもたちの家庭環境

そういう中でいろんな出会いがあるわけですけど、なんで学校に行つてないかという、親の状態に土日ということがあります。「あいりん小中学校」は、子どもには親がいるのですが、父子家庭が一番多く、三分の一が父子家庭です。次が母子家庭、そして両親がそろつている家庭は三分の一以下です。ですから、お父さんが日雇い労働をしながら子どもを育てている。飯場を歩んでいきながら子どもを育てている。

小学校三年の子と話したときに、「先生、俺酒飲むんだ」という。何でというと、飯場に行ったら大人が小学生に飲ませるのですね。タバコも吸つたことがあると。子どもを連れて飯場に来る人たちというのは少ないですから、みんなかわいがつているつもりでそんなことをする。小学生なのに、不思議に思わずに、酒を飲んだりタバコを吸っていた子どもたちがいた。お父さんの仕事の関係で転々と場所を変えなければならぬ子どもがいました。あるいは、ある子なんかは、今のように保育所が発達していませんでしたから、お父さんが子を背負つて仕事に行つ

たという。左官の仕事をしていたのですが、子どもを連れて来たから賃金を下げると言われた。そういう子どもたちが私のいた学校に児童生徒としていたのです。

ですから、生活の知恵はありましたが、学力は一般に言って低かったことは確かです。先生方は苦勞されていました。一番長く学校に行っていないかった生徒は、中学校の三年生の年のころに始めて学校に来たということで、それまで小学一年から数えて八年間学校に行っていないかった。小学一年から入れるわけにはいけないので、中学二年に入って何とか卒業させるということなので、学力がなく卒業ということもあつたのです。それも、お父さんが日雇い労働者で貧しいということがあつたからです。私はそういうことを経験したのです。

もうひとつ特徴的なことは、今日日本中で子どもの貧困などといわれていますが、朝ごはんを食べてない子がたくさんいたのです。あるとき、子どもたちが体育をやつたのです。午前中です。そしたら倒れる子が何人かいた。聞いてみたら朝ごはんを食べてないという。何で食べてないのと聞くと、お父さんが四時とか五時に、まだ子どもが寝ているときに仕事を探しに出してしまう、お金のあるときは置いていくがないときは置いていけない。すると、子どもはご飯を食べないで学校に来て、昼の給食まで何も食べないでやっているから、体育の時間は頭が痛いとかお腹が痛いとか言うが、その実、お腹がすいているのです。そういう子どもにもたくさん出会います、公立の学校だったのですが、大阪市に「朝の給食をせよ」という運動をしたのです。大阪市にそれは親の問題で

市がやる仕事でないと、冷たく突き放されたのですけれど、そうじゃなくて、子どもが教育を受けるのに、そのための条件が出来ていないのだから、義務教育は特にやって欲しいと言って、やっと、しぶしぶ、大阪市は認めて「あいりん小中学校」の子どもにも朝の給食を提供するようになりました。ただし、全員でなくて、食べてこないということを申請した子に牛乳とパンを出す、それから授業を受けたということがありました。

校舎も運動場もプールもない公立学校

釜ヶ崎にはたくさん子がいて地域の学校には合計千人くらい行っていたのですが、そこでは受け入れられずに、「あいりん小中学校」という独自の学校が出来たのですが、さきほど言ったように校舎がないのです。大阪市にずっと校舎を建てろといい続けてきたのですが、十年以上経って、最後に子どもたちの親たちが怒つたのです。それまで地域の人、町内会とか、地域の有志の会「愛隣会」とか、が優しく言っていたら大阪市は全然校舎を造ってくれなかった。とうとう子どもたちの親たちが、特に労働運動をやっていた人たちが怒って、大阪市の教育委員会に、本当に、殴り込みをかけた。なんて言ったかというのと、「うちの子どもを豚小屋で教育するのか」。わっーとやったのですね。それで、それまで、ああでもない、こうでもないと言っていた教育委員会がやっと校舎を建てることになったのです。多分、日本中を探しても、義務教育で公立の小・

中学校を間借りしているようなことはないでしょう。

運動場はどうだったかというところ、運動場はありませんでした。近くに阿倍野斎場というお墓があるのですが、お葬式のないときはそこは広場になっていますから空いているのです。学校から三十分くらい歩いていって、野球をやったり、いろんなスポーツをやっていた。もちろん体育館なんかはありません。夏になるとプールなんですけれど、プールも近くの小学校に行つて、小学生が給食をしている間に借りて、あいらん小中学校の子どもたちがプールで泳ぐ。すると、みんなが上から見ると馬鹿にするんですね。中学生なんかは上から小学生に見られて泳ぐのはいやだから水泳の時間は大きらいだと言っていました。給食室もありませんでしたから、一番近くの小学校の給食室で作ったのをリヤカーに乗せて運んでくる。冬になったら運んでくる間に冷めてしまう。ともかく子どもたちは、教育基本法で、あるいは憲法で、無償で義務教育を受けることが出来ることが保証されている教育を、惨めな環境で受けていた。

そういう中で、さつき言ったように、殴り込みをかけてやつと一九七四年の暮れに学校が出来た。六一年に学校が出来て十三年後にやつと校舎が出来たのです。その年の卒業式に卒業生が答辞を読んだのです。その場において私も涙が出たのですが、言ったのは、「私たちはこんな立派な校舎で卒業式が出来てうれしいけれど、私たちのお兄さんやお姉さんたちはあんな学校で卒業したので、本当に申し訳ない」。中学生にそんなこと言わせるかと思いました。そういうことがありました。親が貧

しいばかりに子どもがそれを負わされるということを、そこで痛いほど感じたのです。

子どもの親の状態

親たちがどういう状況に置かれているか、ということを考えて親のことをやろうと思ったのは、私の仕事を引継ぎしてくれる方がいたので交替をしたからです。一番シヨックだったのは、ある冬の正月明けに学校に行つたときです。子どもに「正月何した」と聞いたのです。いろんなことを言つたのですが、ある子が僕はお父さんと一職安みたいな所があるのですが、野宿していたというのです。というのは、日雇い労働の場合はそのなんですが、十一月の二十五日過ぎから一月の十日ごろまで、仕事がなくなくなるのですね。そうすると、そのときは、日雇いですから、お金がためてなければ、簡易宿泊所にもいけない。ご飯は誰かに食べさせてもらうことは出来るけれど簡易宿泊所に泊まることができないから、親子で軒下で野宿をしていた。たまたま、大阪府の職員が回つてきて、毛布なんかをくれて正月を迎えられた。でもずっと野宿だったという。そういうことを聞いて親の問題をしなければならぬなと思つて、一九七五年学校を辞めた年から親のことをやるようになりました。

一九七五年は釜ヶ崎で労働運動が非常に盛んでした。先ほど言ったように、賃金を払わないとか、労働条件が違反した場合は、労働組合が行つて、そこで交渉して賃金をもらつたり、労災の補償をもらつよう

なことがあった。地域の中で働いている人たちはよかったです。働けない人たちがいた。そういう人たちはまったく放ったらかしになってしまった。労働運動は、今で言うホームレスに関心を示さなかった。一九七五年の冬から、外で寝ている人たちがいるということで、私たちが関わり始めた。生活支援ということに関わったのですけれど、一番ショックだったのは、ある公園の片隅で労働者が血を吐いていたのです。「何んで」と聞いてみた。そしたら結核だということです。「なんで、結核なのに病院に入れないの」と聞いたのですが、そのとき詳しいことが分かっていたわけではないのですけれど、結核の人は病院に入るのは当たり前だと思っていた。その人は排菌、菌を出していた。結核予防法では菌を出している人は強制的に病院に入れなければならないことになっているのですが、釜ヶ崎では普通のことが行われていない。もし、釜ヶ崎以外の地域でそんなことがあったら町中で大騒ぎですね。後で数字を言いますけれど、結核になった労働者がいっぱいいたのです。入院できた人もいたけれど、入院できない人もいて、そのような人が血を吐いて倒れていた。そのとき、労働運動のほうも結核患者を入院させるという運動はしなかった。組合は労働条件に関するをやっていたので、生活まで手が回せなかった。私たちは幸い労働運動に直接関われないので、労働運動が目が行かない所をやるとうということ、野宿している人たちに出会った。そしたら最初に出会ったのが結核の人でした。

それから二つ目は高齢者。日雇い労働では、元気で力が要りますから力のない人は働けない。三つ目は何かというと労災です。最近はどう

さくなつたから労災保険は適応されますけれど、昨日まで、それこそバリバリのとび職なんですけれど、事故があつて、高い所から落ちて、骨折したら、次の日親方の所に行ったら、もうお前いらんと言われた。私たちが夜回りしていたら、昨日落ちて身動きできないので、ここで寝ているのだと。そういう人に出会った。ですから、野宿をしている人たちは、病気、高齢、それから事故。元気な人は労働条件もよくなつてい

結核、患者が入院できない

最初に始めたのは、ショックな出来事だったので、何をしたかというところ、こんなことは法律があるのである意味で恥ずかしいのですが、結核患者を入院させるという運動を始めた。法律では入院させるとなっているのに、そうならない。そのとき、結核のことである本を読んでいたのです。皆さん知つていらつしやる方がおられるかも知れませんが、中国革命に参加したカナダの医師でベチューンという人がいるんです。その人が結核のことについてこんなことを言っているのですね。「金持ちの結核と貧乏人の結核がある。金持ちは回復し貧乏人は死ぬ。云々。結核菌は社会問題である」。

僕は結核菌は医療問題だと思つていたのですが、何度読んでも結核菌は社会問題であると書いてある。その裏返しなのが、「金持ちの結

核は治るし、貧乏人の結核は治らない」だったと思うのです。僕も小学校のときに結核して、中学校で結核して、高校のときずっと結核で、大学に入るとき、レントゲンで引つかかったら入れませんといわれ、大きなレントゲン写真と一緒に願書を出せといわれた、そんな時代でした。結核に対して、ある種のコンプレックスがあったのですが、結核菌が社会問題だという。三回目の結核は釜ヶ崎の中でとうとうなりました。入院はしませんでした。三年間療養生活でした。貧乏人は死ぬといわれていました。たまたま、金持ちでなかったのですが、死ななくて済んだ。

その本にこう書いてありますね、「時間と金の不足のほうは、その病気に対する抵抗力の不足よりも、より多くの結核患者を殺すことになる」。今、結核はあまり問題になっていないと思いますが、時々マスコミも取り上げますが、非常に大きな問題です。日本は先進国の中では結核がものすごく多いのです。それは日本が貧乏だということの証拠なのです。釜ヶ崎もそうです。元気で働いてお金のある人はすぐ治されたけれど、お金のない人は、年をとって血を吐いたり、結果的には病院に入れなくて亡くなる。

そういう人たちを私たちは回つて見つけて入院するような働きかけをしたのです。結核予防法では、治療費は自治体や国が病院に払うのですが生活費は出さないのです。そうすると病院の方は一応、三ヶ月、六ヶ月、あるいは一年経ったら、ある程度結核は完治するのです。最近ではリハンプシンという薬があつて、昔と比べて、ストマイとかパスとかいう昔の薬と比べて、もっと効く薬があつて治るのです。

ある日、労働者が仕事場に行つて階段を登っていたら、しんどうてしんどうて、おかしいなと思つて、疲れて寝られない。誰かに相談したら、ちよつと病院に行つてみたらと言われ、行つてみるともう肺が真っ白。自分は結核なんかにならないと思つて働いていた人ですが、そうなる最低三ヶ月は入院していなければならぬのに、生活費が一銭もないのです。生活保護で入ったら、日用品費として月に二万円ほど入るのですが、それがなければ結局隣近所の人に世話になってしまう、だんだんだんだん居づらくなつて飛び出します。病院に入つて一ヶ月か一ヶ月半くらいすると、一番辛いときに比べてうんと楽になる。すると、私たちに無断で退院してしまうのです。お医者さんが退院してもいいと言わないのに勝手に退院していく。そして、気持ちがいいから次の日から働きに行く。自分でご飯は食へられるし、簡易宿泊所に泊まれる。ところがですね、完治していませんから、一年くらい経つとまた振り返ります。また入院する、また出てくる、また振り返す。そうすると、今度は、六か月くらいかかる。私が野宿している人を見て回ったときに出会ったのは、このような繰り返しでは、三回目は三ヶ月くらいで再発している。こういうようなことで、よく言われていたのですけれど、「病院の正門から入つて裏門から出る」労働者の中ではそういう言葉があつたのです。何を意味するかというと、入院は救急車で正門から入るけれど、（あまりいい言い方ではありませんが）、棺おけに入つて裏門から出る、ということ。あの病院は後ろから退院する人のほうが多い、と言われたことがたくさんあつたわけです。

自分たちは素人だからどうにも出来ないということで、キリスト教のグループで結核を専門にやっている看護師さんを見つけて取り組んだことがあります。今でしたら訪問看護とか巡回看護とかありますけれど、今から二十五、六年前ですから、そんなことまったくやっていなかった。地域の医療機関と協力しながらですけれど、そういうことをやって労働者が自分の健康は自分たちで守るような、そして路上で血を吐いて死ななくていいという、そういう環境を作ろうとやりました。それでも毎年百人以上が行路病死。法律的には、日本には行路病死あるいは行路病死という法律があるのですが、旅をしている間に亡くなるというのがそのことですけれど、釜ヶ崎の中では生活していて泊まる所がなく、あるいは入院できなくて行路で亡くなる。しかもこれは身元が分からない人、釜ヶ崎では年間亡くなる労働者の数は五百人くらいです。そのうち身元が分かった人は引き取られるのですが、引き取られない人が大体百人前後います。毎年それくらいあります。

警察は死因を確かめるために解剖するのですが、そのうち二人あるいは三人は、特定できる死因が結核である。これは考えたらずいことだと思えます。法律があつてそれは結核をなくすためにあるのに、人生の最後に結核にかかつて路上で死んでいくという。そういうことが釜ヶ崎ではあり、私たちも何度か現場に出会ったことがあります。これを何とかしなければならぬと思つて始めたわけですが、幸いそれに取り組んでくれる看護師さんが、その当時は看護婦さんですが、来てくれてやってくれましたが、それでもそれくらいあつた。

今でもその実態は変わっていないのです。どうかというと、全国平均は、十万人に対して結核にかかる人は、罹患率と言っていますが、二〇・六人、これでもものすごく高いのです。アジアの発展途上国といわれている国と近い値です。大阪府は日本の大都市の中でダントツなのです。日本全体の平均の二倍で、五七・〇人。ところが、釜ヶ崎のある西成区は二八四・三人。全国平均の十四倍、大阪市の五倍以上です。そして、釜ヶ崎だけ取ってみると、六七六人。すごい数です。大阪市の十倍、日本全体の三十五倍、それくらいで毎年結核になっている。これでも前よりはよくなったといわれているのです。最近は大阪市の名譽のために言うと、デジタルのレントゲン車を買つたので、労働者が受診するとすぐそこで結果が出て、あなたは入院したほうがいいですよ、あなたは生活保護をとつて治療に専念してくださいよ、というようなことを即やるようになって変わってきましたけれど、それでもこの数字なのです。私たちが結核にかかったのは疲れもありましたが、一緒に仕事をしていた人は、子どもも含めて知っている限りで、十人のうち四人はなつていきますね。

入院

大阪市も、日本で最悪と言われないように一生懸命取り組んでいるのですけれど、病院も結核患者は儲からないので、非常に粗末にされています。その粗末にされている例をひとつ言いますと、大阪の南のほ

うの病院に入院している労働者から私たちに連絡があったのです。面会に来て欲しいと。その病院に何人かで面会に行ったのです。そして、まず、面会させてくれない。鍵をかけて門から入れてくれない。何でかという、それはあとで分かったのですけれど、その病院があの人たちは過激派だからと周りの人たちに言っていた。その病院はどんなことをしていたかという、結核患者をベッドの上でなくて、病室がなくなつて、廊下に布団をひいて結核患者を寝かせていた。そのことで抗議をした労働者が強制退院させられて、それで、面会に来てくれという連絡をしたということです。

そういう病院は医療費が低いかというと、やっぱり一人当たりに出る治療費は同じなのです。コンクリートの上に直接薄っぺらい布団をひいて、亡くなる寸前の人が寝かされている。大阪市もある意味で放ったらかしにしていたし、病院も儲からない人は何とか入れておくというようなことなので、「正面から入つて後ろから出る」ということになる。私たちが抗議していたら警察を呼ぶぞ、などという。大阪市内にこんなひどい所にお金を払うのかと言ったら大阪市は言いました。「医療の内容については大阪府の担当です。大阪市は請求があった医療費を払うだけです。内容について言われても我々は知りませんので、大阪府に抗議してください」。でもこんな治療を受けている所にまともなお金を払うのですかといったのですけれど、暖簾に腕押しでした。

そういう中で、ひとつだけ、これは私が言っていることではなくて新聞に載った記事の見出しですが、一九八一年の二月二〇日の朝日新聞に

でたのですが、「結核患者に非情なお役所、入院断られ死亡」。この患者は結核であるという診断書を持って福祉事務所に入院の相談に行ったのに、あんたはまだ入院する必要はないと言って、けられて、相談の翌日地下鉄の入り口で倒れていた。大阪市はいろいろ弁解しましたが、これが現実です。

先ほど言ったように、今一生懸命やっているとすることは否定できませんですけど、こういう流れがあったということです。野宿をしている人たちは、結局、仕事がない野宿をせざるを得ない。その人たちは結核にかかつて、最後は路上で死んで行く。そういう現実がある。そういうことをずっと見てきた。今は少しはよくなったかな、と思います。

バブルがはじけて

一九九三年というのはバブルがはじけてからですけど、私の第三段目の活動時期になります。それまで専任でやっていたのをボランティアでやるようになった年です。釜ヶ崎は、今、四万人いたところと比べると、労働者の数は大体二万人以下に減っています。そのうち日雇い労働者をしている人、手帳というのがあるのですが、それを持っている人は十分の一にも満たない。かつては二万五千人くらいは日雇い労働者の失業保険の手帳を持っていたのですが、今は三千人以下（正確には二四〇〇人）もないと言われています。そういう意味で、どちらかというと、生活保護を受ける人たちが多くなったということです。

生活保護を受ける労働者の街になって街の様相が変わりました。臨時のシネターを建てていきますけれど、夕方の六時から朝の五時まで泊まるだけのシネターを大阪市はやつと造ったのですけれど、野宿をする人はある程度減つてきて、生活保護のほうに移った人もいて、今シネターに泊まっている人は四、五百人です。街が日雇い労働者の街から生活保護の街に変わってきた。社会福祉が中心になる街に変わってきています。

経済の原則でいうと、不況になって最初に犠牲をこうむるのは日雇い労働者であるというのは、見た目にもよく分かります。景気が回復しても最後になって恩恵にあずかるのも日雇い労働者です。私たち目で見て来ています。釜ヶ崎の中には毎日炊き出しをやっているグループがあるのですけれど、その炊き出しに並ぶ人が多いというの不況だし、それが縮まっていると、景気がよくて仕事があつて、本当に身体を壊した人しか並ばない。そういう意味で、炊き出しに並ぶ人の数を見れば、経済学者がいよいよ不況に入ったとか、バブルがはじけたとか言う前に、それらのことが分かります。典型的に現れます。一九九〇年代にバブルがはじけたときに、一九七〇年ごろのオイルショックと同じで、まあ五、六年我慢しようかと言っていましたけれど、結果的にはもうそろそろ二〇年ですね。二〇年仕事がない状況が続いています。

野宿者のおかれた状況

初め私たちが夜回りをしたころには、地域だけでも大体百人くらいしか野宿をしていませんでした。本当にみんなすまなきそうに野宿をしていました。だから、こう、物の陰に隠れるようにして。一九九〇年のバブルがはじけてからは、ある意味で、堂々と、仕事がないから野宿して空き缶集めて廃品回収して生活するのだと、ブルーシートを道路に張ったり公園に張ったり、自分で食っていくためにはこれしかないというところでやる労働者が増えた。

たとえば、アルミ缶は一個一円くらいですから、千円稼ごうと思つたら千個の缶を集めなければならぬ。それをやるとみんなが競争になつて、八時間くらい歩き回つてやつと集められるくらい。一日の収入千円。若い人たちが失業して釜ヶ崎にやってくる、若い人がそれを先に取ってしまうから、仕事がなくなり、今までそれで細々と食べていた人たちが今度市内に行つて、コンビニなんかで親切な所が、これは時間ぎりぎりだけれど食べられるからお弁当をくれる、それを食べる。釜ヶ崎全体では野宿している人は一見減つたようですが、市内じゅうに野宿者が広がっている。一番多かったときは、労働組合が調べたときは七千人前後だったのですが、大阪市が実態調査したときは八六〇〇人いた。でもそれは目視と言つて、一人ずつ訪ねたのでなくて、歩いてあそこにもいるここにもいると調べた結果です。そのとき労働者が言っていたのは、それより五割増しくらいだろうということでした。だから、一番野宿者が多かったときは、大阪市内に一万二千人くらい

いた。どこでも出会いました。

こういうことがあった中で頻繁に事件が起って、野宿をしている人たちが襲われることがありました。空気銃で撃たれるとか、ダンボールを集めて寝ていたらそれに石油をかけて火をつけるとか。それから蹴っ飛ばすとか、唾をかけるとかは、日常茶飯事でした。そのときに、今はだいぶ変わってきましたが、マスコミが言っていたのは、あれは労働者が怠けているからです、だから野宿しなければならぬのだ。自己責任だと。だから蹴飛ばそうが、火をつけようが、それは自分の胸に手を当てて考えろ、というような風潮でした。

ところが、そういう中でも堂々と野宿をするようになって、釜ヶ崎の中でもある人たちは野宿をしていたのですが、中学校の隣に公園があつてその周りに八十人くらいテントを張って生活をしていました。そしたら、それに対して、学校のほうからあるいは町内から、あの人たちをどつかにやってくれと要望が市に出され、行政代執行というのがあつたわけです。行政代執行というのは、普通は、ここに建物を建ててはいかんといい所に建物があつた場合、何度言つても撤去しないとき、市がお金を負担して代わりに行うのが行政代執行ですが、この場合、人が住んでいる所を物と考えてテントを行政代執行したんです。行政代執行の題目が「不法占拠物等の排除」。ブルーシートのテントの中でやむをえず寝起きしているのを不法占拠であるとし、道路法で実行したんです。一九九八年の十二月二十八日、朝から僕らも行ってたんですが、たくさんのお阪市の職員と機動隊とが来て行政代執行を行っ

た。人のいる所はつぶしませんでしたが、中に一人がんばっていた人がいたんですけれど、出てしまった後、労働者が見ている前で、自分がこれまで生活してきたテントをつぶされてしまったということがあります。

何で行われたのか、それは教育環境の浄化という名目でした。保護者の中も半分は割れて、よく分かつている人たちは、そこまでしなくてもいいだろうと、いや、あれをやらないと大変なことになると。でも、子どもたちは、そのテントに向かつて火の付いた紙飛行機を飛ばしたり缶かんを投げたりしていたのですが、そのことについては学校は全然注意しなくて。とにかく労働者が悪いと。

その後、労働者たちが弁護士と相談しながら、行政代執行の処分取り消し請求というのを裁判で起こしたんです。一九九九年です。最高裁までいってみんな負けました。高等裁判所るときに、僕も証人になってくれというので、証人になって、釜ヶ崎にそういう環境があるのだから、テントを強制的に取り除くよりもむしろ学校教育の中でなぜ労働者が野宿しなければならないのかという教育をやるほうが大切なのではないかということや、自分がいりん小中学校でケースワーカーをして親のこのことを見ているのでいろいろ言いましたが、大阪高等裁判所の判決の中に、私の言うことは措信(そしん)できない、つまり信用できないと。理由は何も書いてないのですよ、ともかく小柳の言ったことは措信できないから採用しないと書いてある。この部分は裁判官の知っている実態にそぐわないから措信できないと言っているなら僕は納得します。お前の言っていることは最初から信用できないから証拠として採用できない、

それ一行だけ書いてある。裁判官というのは人権感覚がないなと思いましたが。僕たち、強制排除されたとき以来、その人たちと、雨の日も裁判所に行ったり、区役所に行ったり、していたのですが、それを一言で信用できないからと。悲しかったですね。貧しかったら、裁判でも頭から、なんていうのか、平等に扱われないということですね。しみじみと感じました。

人間関係と貧困

貧困について、こんなことを言った人がいるようですが、貧困というのは決定的な政治不在だ。政治不在が貧困を生み出しているのだというのですが、そのことをいやというほど感じてきました。最近は、少し生活保護を取る人が多くなって、仕事がないけれど、かつてよりは少し生活にゆとりのできた人が出てきただろうと思います。

後で質問が出たときにいろいろ答えることにして、最後に一言だけ言つて終わりにしたいと思います。

私は、貧困というのは確かに経済の問題が非常に大きいと思います。でも、もうひとつの原因というのは、労働者という関係してきて思うのは、人間関係ができないのが貧困を生み出すということだと思います。というのは、助け合いがなくなるのです。たとえば、昔の村の場合、ある家が困つていけば助けに行く。今は、多分、そうならず農業も変わったと思います。釜ヶ崎では、人間関係が崩れてきた。何でかという、釜ヶ

崎というのは、労働者の街で労働でつながっていた。仕事がなくなつてみんなばらばらになつて、仕事ができる人は仕事をするけれど、仕事ができない人はほつたらかしくなる。そうになると、人間関係ができなくなつてくると助け合いがなくなつてきます。生活保護なんかをもらつても一人ひとりがアパートに別々に住まわされて、隣は何をする人ぞ、になつてしまう。極端になると、亡くなった人が隣にいたのに亡くなつてから何日かたつて発見されたりということが起こってくる。そういう共同性、互いに助け合つていくという、かつて釜ヶ崎気質としてあったものが、困つたときはお互い様だと言つていたものが、今はなくなつてしまつた。あいつはあいつ、俺は俺だということになつて、釜ヶ崎というひとつの地域がばらばらにされている。ある程度生活保護があり、九〇年度るときよりは見た目の生活はある程度保障されていますけれど、人間関係が本当にばらばらにされてしまつて私を私は今痛感しています。

貧困ということは経済的な貧困ということもあるけれど、人間関係の貧困ということも考えなければならぬ、かなり大切なことだなあと思つて、それをどうやって取り戻すかということが、長年釜ヶ崎に関わつてきて感じているところです。かつて沖繩から出てきた人たちのグループが釜ヶ崎で「社(しゃ)」をつくり、釜ヶ崎の路上で宴会を開いた。どういふことかという、沖繩出身者はわりと仲がいいのですが、十人いて十人とも仕事があるわけでないとき、三人とか四人が働いて稼いだ金をもつてきて、みんなで食べ物を分け合つたり、酒を飲んだり、そ

ういう和があつたのです。今、そんなのは全然見えなくなりました。もうみんなばらばらにされている。自分が稼いだものは自分のものだ。そういう意味で仕事がないというのは、人間関係を本当に貧しくして、貧困の見えない原因になっているのでないか。

とりあえずこれで時間も来ましたので、終わらせていただきます。

講演後の質疑応答

シエルター、炊き出しとは

早川 シェルターというのはどういう構造になっているのですか。泊まるだけというお話でしたが。

小柳 プレハブで二階建てになっていて、二段ベッドでひとつのプレハブに百人泊まれる。鉄の二段ベッドがずつと並んでいる。毛布が一枚ついていて、それが六棟あつて、全部で六百人くらい泊まれて、それに簡易トイレとシャワー室と洗濯する所があります。さっき言ったように、夕方の六時に入つて朝の五時には出なければならぬということです。それはNPO釜ヶ崎支援機構という所が大阪市から運営を任されていて、朝みんなが出て行つたら掃除をして、夕方は迎え入れて、券を配つて、それで後は寝るだけと。造るときに地域の反対があつて、窓は片側しかないのです。裏は、町内会の反対があつて、窓をつけるとうるさくなるからと付いていません。

釜ヶ崎は外から差別されているのではなくて、中で日雇い労働者も町

内会から差別されている。中でいろんなことが起こらないように、NPO釜ヶ崎支援機構の人たちがその人たちを徹夜で見守っている。夜中に具合が悪くなったら救急車を呼ぶとか、そういう形で運営しています。一番多かつたときは千人と言いましたが、千人はみんなが全部泊まれなくて、今、四、五百人くらいで、ふたつのシェルターにいます。問題はそこから次の段階の自立支援センターというのがあるのですけれど、とりあえず、シェルターはそんな形で運営されています。冬は寒くて夏は暑いという。

早川 食事はどうなっていますか。

小柳 食事はできません。食事は、労働者のグループが二つあつて、「釜ヶ崎炊き出しの会」というのが、毎日二食、朝の十一時と夕方の四時から五時まで行っています。それも、一銭も行政からお金をもらっていないので、カンパだけでやっています。みんないろんなことを言っていますが、しゃぶしゃぶのお粥なんです。もうひとつのグループは週二回やっています、三角公園という所でやっているのですが、それはわりと食材があるので、週二回ということもあつて、まあまあ雑炊ですけど色んなものが入っています。それに、労働者が四百人、五百人並ぶ。一番並んだときは二千人並んだ。だから、朝の十一時に出そうと思つたら、朝の三時や四時から準備してやつと十一時に間に合うということです。それを食べて何とか助かつて、その後、社会資源を使つて釜ヶ崎で何とか生活できるようになったり、入院できるようになったりしているので、いろいろ批判があるにしてもそれなりの役割を果たしています。

早川 炊き出しは一日一回なんですか。

小柳 AグループとBグループとがあつて、Aグループは一日二回、片方のグループは火曜日と土曜日の昼に一回だけやります。そつちは、まあ、ごちそうというか、ある程度ある。そのほか、一時暴力団もやっていたことがあるのです。お金がなくなつたので最近やつてませんけれど。労働者は順番をつけて、一番いいのは暴力団の炊き出し笑、二番目はAグループの炊き出し、三番目はBグループと言っていましたけれどね。シエーターに並ぶ労働者には大阪市が出しているのは非常時の乾パンです。行列に並ぶ人に一個出しているだけです。でも、高齢者の人にしてみると、実際僕見たのですけれど、乾パン食ったら歯が折れるというのですね。日雇い労働者はものすごく力を入れてるので、歯が悪いのです。それに年をとってきたらなおさら悪いので、おなかすいているからその乾パンを食べるけれども、歯が二本も折れたと言う人がいて、一時期水を出していたのですね。ところがその水が高いので、大阪市もいつの間にかやめたのです。乾パンのほうも、備蓄切れというところかしらですけど、期限ぎりぎりのをまわしている。食べ物を出せと言ったら、もし大阪市が外で炊き出しをやつて事故があつたら大変だから出さないと、民間でやつているのは責任をおわなくてもいいから。だから、一番安全な乾パンと。ペットボトル一本の水、今は出していませんが、水を出していた。

公然と行われている中間搾取

参加者 A えつと、私一時なんですけれど、学生時代大阪に住んでいたとき、東大阪だったのですが、厨房機械の設備のアルバイトをしていて、そのときに人足さんがいらつしやつたのです。その方というのが釜ヶ崎の方だったのです。一緒に仕事をしていまして、年齢で言うと五十才から六十歳くらい、もしくはもうちよつと上かなというくらいの人でした。当時、一九九四年か五年でした。私そのときは二十代の前半だったのですが、その方と一緒に仕事をしていて、その方の仕事のスピードについていけませんでした。大変な労働能力であることはその場で感じました。一番心に残つたのは、食事を一緒にしていたのですけれど、そのときに始めて釜ヶ崎の人やということが分かつたのですけれど、賢そうなことをちよつとでも言うのと、「何をお前は」と、そんなふうなことを仲間内で言い出すというふうな感じでした。いらつしやる方どうしのなかでも、感覚というのは、同じ底辺層、社会の底辺層にいる人間同士は、過去がどんなのであつても、今はお前はこんな状況でないかと、いうふうなことをどんな会話の中にも、ぼんと言われた。今でも記憶に残っています。

そのとき初めて会つたのですが、昔からそういう方は怖いというイメージがあつたのです。一緒に仕事をしていて、その方たちの話を聞いていたりすると、すごくまじめに仕事をして、すごく優しくつて、そしてすごくまじめな方ばかりでした。その方たちのもらっている給料をあとから仲介人の人からちつらと聞きましたら、下請けのときは一万四、五千円くらいで受けて、そのうち七千円くらいを仲介人が取つて、残

りを労働者がもらおうと。そんな金額だったと聞いています。その金額で私と同じくらいの金額を受け取っていた、私以上の仕事をしているのに。その当時でも、いい人やなど、いろんな話しをする人たちやなど、その当時、印象を持ったのですが、先ほどの小柳さんのお話の中で、貧困で人間関係が薄くなっていると言われましたが、今の人の質が変わったのか、人が変わったのではないかなと思ったりしたのですが。

小柳 人が変わってきたのも確かです。先ほど言いましたが、一九六〇年代に炭鉱が閉山になつて失業者がどつと入ってきました。炭鉱というのはお互いに助け合わないと生きていけない。その後、一九七五年のときは、造船とか鉄鋼とかが悪くなつて、そこで働いていた人たちが釜ヶ崎に来るようになった。それでもまだ労働者は労働という形で結び付いていたと思うのです。建築なんかでも。

でも、最近釜ヶ崎に来る人たちはそういう経験がなくて来ている。いわゆる失業して直接来ている、あるいは高齢になつてきている、というようなことがあつて、中にいる人たちもかつての釜ヶ崎の日雇い労働者が何をしてたのかということもほとんど知らない人たちの世代になっています。特に若い世代は、ほとんど知らないと思います。たとえばさつき言ったような、労働運動があつたとか、あるいは結核のことでこんなことを労働者がやっていたことを一切知らない人たちがいて、ここに来たら何とか生活保護が取れるということである地域から入ってきている。そうすると人間関係が非常に薄くなつてきているということがあつて、もし働くというようなことがあれば、お互いに助け合つてい

かなければならないから回復するんじゃないかなと思うのですが。経済というよりは、両方が行ったり来たりしているのだなという感じがす。

確かに今言われたように、僕らはピンはねと言っているのですが、建築労働では典型的ですね。大手の建設業者が受けたときには日雇い労働者に払う単価は二万円を超えていたと思うのです、バブルの時期。そのとき何層にもピンはねがあつて、第一次下請け、第二次、第三次とあつて、一番下が日雇い労働者なら、途中で二千元ずつ取ると、五つも入れれば一万円なくなる。景気がよかつたときでも一万余千円しかもらつていないことになる。工事を請けたときの単価は、大阪市の工事なんかでも、二万何千円と書いてあるのです。中間搾取をする人を私たちは手配師と言っていましたけれど。質の悪いのは暴力手配師といって、暴力団関係者がそれで利益を上げていた。今はそういうことができなくなつたから、貧困ビジネスというのですね、必ずしも暴力団ではありませんが、生活保護の人たちをいっぱい集めて、ある一定の所に住まわせて、食費と生活費ということで一日二千元かかるから六万円と家賃を四万円とつて、生活保護費一月十二万円のうち二万円だけしか本人に渡さない。そういうのを、大阪では黒い背広を着た人たちがやっています。

参加者B いま聞いていたのですが、自分らの組織を運営するために、こんな人たちにまでそんな辛い思いをさせるのかと思つて、すごい腹が立つてしまつて、なんともいえない気分になつていられるのですけれど。

小柳 物を取ったら犯罪であると。しかし、そういう中間搾取は犯罪にならない。でも帳面上は労働者一人当たり払われるのは、二万一千円だから、この工事は何億円ですと計上されている。実際に手元に渡るのは、単価に二万一千円と書かれていても労働者がもらうのは一万円くらい。これは誰かが取つていったから減つたので、これがなぜ犯罪にならないのだろうと、労働者と話していたときにしきりに言っていたことがありますね。たとえば、傘一本取れば犯罪になるのに。あの人が何が何をしているのか、目に見えて分かるのですね。そんなことは日常茶飯事にあるし、生活のほうでもそうです。

たとえば、この辺でも原発を造ったときに釜ヶ崎から労働者がいっぱい来ています。最近はその所は募集しなくなりましたが、ある時期は公の機関がメンテナンスのために労働者を募集していました。それは何でかという、時間単価はともいいのです。一日放射線の関係で十五分しか働かなくても、普通の人がもらっていたのを同じくらい、一万円なら一万円、もらえるということで、一ヶ月いたら三十万円くらいになり、必要なものを払うにしてもかなり手元に残る。それは、発ガンの原因になるということで公の所は止めて、いわゆる業者、手配師が集めていたことがありますけれど。この辺に行つたことがあると言つた人がいます。でもそれは硬く口止めされているそうです。どこに行つたと絶対言うなど。どこの原発で放射線を浴びてガンになったかは、分からない。

人間関係が大切

参加者C きつき、現場にそういうふうな形で入つたということを知りましたが、私たちも社会の構造からそういうことはありうることは知つていたけれども、相当違いがあるのだなあと感じています。いくら平和な社会になつても人間関係が一番大切なのだと感じた次第です。

小柳 そのことですよとですね、一九八〇年代の終わりから、外国人が日本に来て働くようになりました。そのとき釜ヶ崎で集会をやつたときに、労働者から「あいつらが来るからわしらの仕事がなくなるのだ」と、百人ぐらゐの集会で自由に意見を言つてもらつたら、そういう声がいっぱい出たのです。でもそれから、あと一年くらい経つて集会をやつたときに、実際に労働者が経験したら全然違う声が出てきた。どういうことかという、「おれたちだつて釜ヶ崎で生まれて釜ヶ崎で育つて労働者になつたのでない。どうかで失業してあそこに行つたら、その日から働けて、その日から飯が食えるというので、ここに来たんだ」と。フィリピンから来た連中もフィリピンで飯食えないから、いろんな手を通したにしてもここに来て一生懸命働いているのだから、排除するのではなくてその人たちが働きやすいようなことをつくるのが、やはり、同じ日雇いの労働者でないかというのがひとつ。

もうひとつ出てきたのは、始めのころはタイやフィリピンから出てきた連中はそんなにバリバリ働かないのですよね。あいつら、働かない、働かないと言つていたのですけれど、あるとき労働者が聞いたのは、こん

な安い賃金でそんなに働けるか、と言ったというのですね。日本人と同じ仕事をしても、外国から来た人たちは安くで働かされていた、言葉ができないとかで。そういうことを知って、同じ仕事をしても、韓国から来ていた人たちは若い人が多く、ものすごく力があつたのです。彼らが、こんな安い賃金はおかしいのではないか、一生懸命働くことはいのではないかと言われて、我々も一生懸命働くことはいのではないのと釜ヶ崎の労働者も思った。

外国人が釜ヶ崎に来て働くことで、釜ヶ崎の労働者も学ぶことがあつて、一年前の集会とは全然違う集会でした。同じ出稼ぎに来て生活しているのだから、国別ではなくて、同じ労働者として助け合わなければならぬというのが、一年の内にできたので、面白かったですね。始めはすごかったですよ、あいつらがいるから！と、ものすごい剣幕で。僕は、外国人労働者と働くという趣旨でその会を始めたとき、お前らそんなことをやるからと散々非難されたんですよ。一緒に一年間働いてみたら全然違う声が出てきたので、その辺はさつき言った働くというのはこういうことかなと思いました。

失業と失業保険

この資料を見て欲しいのですが(資料「昭和六十二年度から平成十六年度までの求人状況(年度別比較)」提供 西成労働福祉センター)、いかに多くの失業者が釜ヶ崎で出ているかよく分かります。先ほども

言っていたのですが、日本は失業率が5%でも大変だ、6%になるかも知れない、などと saying したときに、釜ヶ崎の労働者は、「我々の失業率は90%だ」と。このグラフを見ていただいたら分かると思いますけれど、一番大きな山は一番仕事があつた時期で一九八九年度から一九九〇年度にかけてです。このグラフは二〇〇四年度で切れています。が、今から五年前の二〇〇四年度でピークのときの半分以下で、そのときの求人が一日平均四千人ほどだったのが、今はそれが七百人ほどになっています。日雇い労働にいける人の数がそれくらいですから、今はものすごく減っているのがこれを見て分かります。

早川 今、釜ヶ崎に何人くらい住んでいて七百人の求人なのですか。

小柳 二万人ほど住んでいます。失業保険がもらえる手帳を持っている人が五千人といわれていたのが今や三千人以下になった。かつては二万五千人くらい持っていたのです。その手帳を持っていると、二ヶ月で二十六日以上働けば、一ヶ月に付き最高十三日まで失業手当が出る。

参加者B 日雇い労働に出られる方と日雇い労働にも出られない方がおられるのですね。

小柳 かつては、寄せ場である釜ヶ崎では90%以上が日雇い労働者でした。その人たちを保障するために、いろいろ戦いもありましたが、日雇い労働者に仕事がなかったときは失業保険を払いますという、日雇い労働者のための失業保険ができて、その手帳を持っていた人たちの数は、釜ヶ崎に四万人くらい住んでいたときは六割か七割の人が手帳を持っていたのです。そうすると仕事がなかった日は、届ければ最高で

七千五百円の失業保険料をもらえたのです。

ところが、どんな仕事がなくなつて、それこそ二ヶ月で二十六日なにか仕事がないから、そういう人たちは手帳をどんどん取り上げられて、今はかつての十分の一の二四〇〇人ほどしか手帳を持っていない。他の人たちはどうやって生活しているかというところ、ひとつは生活保護、もうひとつは野宿をしながら空き缶を集めたりダンボールを集めたり大型ごみを持って修理したりして生活費を稼ぐ。若い世代はわりと割り切っていますけれど、年配の人は国の世話なんかにはなりたくないと言われる。いろいろ説明しても、「わしゃね、国の世話なんか」、「世話でなくて権利だというのが、「国の世話なんかやりたくない」。若い人はわりと割り切つて仕事があるまでは出せと言う。

生活保護

参加者B 生活保護を受けなければいいのに、何で受けないのかなと思つたのですが。心意気の問題なのかなと。

小柳 それは年配の人にはすごくありました。抵抗がありました。どんなことがあつても自分で稼いで。そんなこと言わずに、ともかく入院して身体を治してというけれど。一番典型だったのは、寂しいから犬を飼っているんですね、野宿しながら。入院したらと言つたら、この犬どうするのだと。保健所に持つて行つたら殺される、だからいやだと。ずっと、自分の食うものも食わずに育ててきた犬が、自分が入院したら

保健所に持つていかれて殺されるから、入院しない。そう言うので、学童保育の子どもたちが飼つて散歩に連れて行くから入院して、と言つたらやつと納得して入院した。そんな人もいます。最近では、いろんな運動があつて、生活保護を取りやすくなつたのですが、以前は完全に年齢でやられていました。仕事がないからと言つても、若いからダメだと。生活保護法には、そんな年齢制限なんか全然書いてないのですが、稼働年齢は日本が決めているのは六十五歳でそれまではみんな働けるからとロコミで広がっているの、身体が悪くともどうせ六十五歳までは生活保護は取れないと言つて、相談にも行かなかつた人がたくさんいるのです。最近はそのうちでなくて、職安にいつても仕事がなかったら申請したらもらえるように、おろすようになりました。

生活保護をもらつても生活の仕方が下手な人がいるのです。日雇いの労働をやつてるときは宵越しの金は持たない、みたいな事で使つちやつても明日になればいいと。ところがそれがなかなか直らず、生活保護費をもらうと大きな気持ちになつて人に奢つたりして笑、半月でなくなつて、それで、これはみんな言つていたのですけれど、炊き出しに並んでいるのですよ。それを聞いたら、アルコール依存の人もあるし、ギャンブル好きな人もいるし、パチンコでみんなすつてしまふとか、アルコール依存症は病氣だし、ギャンブル好きもそうだし、話し合う場とか集まる場があれば、そつちに行かなくてもいいと思つたのですが、それはなかなかできない。小さなグループが細々とやつていますけれど、なかなか難しいですね、その辺が。生活の考え方が全然違ふから。

参加者B 人間関係が希薄になってきたという話がありました。私

の中では釜ヶ崎は特殊な世界なのかなという思いがあったのですが、希薄な人間関係が貧困の原因のひとつであるとおっしゃったのですが、今人間関係がますます希薄になってきて、自分だけよかったら、隣の人のことなんか知らんと。それは、今の現代にどんぴしゃの言葉だったので、時代がそうなってきたのかと。

小柳 だから少し違った角度で言うと、日本全国に釜ヶ崎の状況が広がって行つたのだらうと思います。貧困と交差しながら。お金のある人は自己責任だという、そうなるべくるとお互いに助け合つては行かない。これはすごく難しいなと思います。労働運動でも、一般の労働者運動は、これまで釜ヶ崎の労働者をなかなか助けてくれなかった、目を向けてくれなかった面があるんですね。あれは日雇いだから、自分であんなつたのだからと。でも、いま見ると、非正規の人が解雇されても、正規の人はあいつらがいては俺たちの賃金が下がるといつて、少しは変わってきたかもしれないけれど、そんなことはあるでしょう。そういうのを見たら、釜ヶ崎で起つてることというのは、日本全国で起つてることかなと思います。

早川 結論を出すみたいなこと悪いのですが、今のようなことを聞いていると日本はだんだん悪くなってきている、人がだんだん悪くなってきているというような感想を持つのですが。釜ヶ崎だけでなく、それほど貧乏でもない所でも助け合いが減っているのではないか。

家族との関係

小柳 まあそういう中で楽しいこともあるし、ここで四十年続いたのは何ですかと聞かれれば、年に一人か二人、ここに関わっていてすごい人がいるんだなあと。労働者の人もいるし、ボランティアの人もいますけれど、そういうことがあるから続いてきた面があると思うのです。

確かに関係はいいとは思わないですね。それをどうやって取り戻すか。関係を取り戻すことのひとつは、今頃、難しい点もありますけれど、血縁関係、血のつながりがありますね、僕はそういう言い方はきらいだからDNAと言っていますが。そうじゃなくて、釜ヶ崎なんかは全部、家族なんかとは関係なく生活していますから、血で繋がる、DNAで繋がることなんかはまずできないのです。助け合いということも、まず、家族で助け合つたらどうですか、というようなことはできない。さっきの朝食の話をしたときに、それは親の責任だといわれたが、それはできない。たまたまいろんな形で気のあう連中が結んだ、そういうものを作る必要があるんじゃないか。つまり結縁関係です。DNAではばらばらですからね。いろんな例があります。僕ら何人が野宿から亡くなる方を通して経験してきたのです。亡くなったときに、血縁で家族に連絡して欲しいとか言うし、僕たちもしたいなあとと思って電話をかけるんですけれど、本人の名前を告げただけで、まず電話をガチャンですね。

参加者D 向こうから切ってしまうのですか。

小柳 ええ。僕らはある程度知っています。プライバシーのことは知

らんことになっていたので、それで最初は病院とか福祉事務所が連絡をする。それでだめで、我々が「近いものですが・・・」と電話するのですが、「いや、もう二十年消息がないんだからそつちでお葬式とか勝手にしてください」という。もう家族と完全に切れています。例外はあったのですけれど、そうですね、小さなグループでずっと夜回りを続けてきたのですけれど、四十人くらい亡くなっている中で九十%はこっちから連絡をとつても、もう一切関係しないでくださいと言われた。「ああ、そうですか」と言つて遺骨を取りに来た人は三件あったのかな。そのうちの一件は、お兄さんが引き取りに来たのですが、弟さんが入院してそこで亡くなったのですが、その方は北海道の方だったのです。本当に歓迎するから、北海道まで遊びに来てくださいと言われた。僕らこの十月遊びに行ったのですよ、北海道まで。そういう人はいますが、本当に例外です。たいていはガシヤンです。

一番手が込んだのは、どうしても連絡を取りたいと言つて、子どもと、別れたけれど妻がいるから、それに知らせて欲しいし、できたら遺骨を引き取つてほしいと言つて。しかし、なんぼ連絡してもダメなんで、葬儀も生活保護費用でするので費用は一切かかりません、こんなふうと言っているから遺骨だけでも引き取つて欲しいと、手紙で連絡した。手紙は着いているはずなんです。着いているはずなのになんの返事もなくて、最後弁護士を通じて、弁護士が自分が全部するから委任状をくれといつてもダメでした。その方は、お連れ合いとは何かあったのかもしれませんが、本当に子どもと連絡を取りたがつていた。手紙が帰つてこ

ないということは相手に着いているということなんですね。だけでも関わりたくない。

一件だけ傑作なのを言うのですね、たまたま病院で亡くなった方がいて、貯金通帳に、多分元氣なときに働いて貯めていたのと思ひますが、いまから十年前くらいですが、五十万円くらいあったのです。電話かけたら、勝手にしてくださいと言つていたのが、でも、お金があるんですと言つたら、じゃすぐ行きますと(会場から えつ)。そういう経験があります。いささかショックでしたけれど。何をいわれても一切関係ありませんと言つていたのに。生活保護で入院していた人ですから、黙つていたら公の金庫に納められてしまうので、そうなりますよと言つた途端に、じゃもらいに行きますと。

参加者D そこまでなるには様々な葛藤があったと思うのですが、多分離婚状態だったと思うし……。

小柳 いろんなことがあったと思いますよ。ある方なんかは、警察のほうからも親族を捜してくれたんですけど、葬儀社に遺体を預かってもらつて、一ヶ月経つても分からず、行路死扱いになつて、お葬式を僕らがやったときはミイラみたいになっていました。元氣なときを知っていますから何ともいえない気持ちでした。家族が一切引き取らないとなると、本当に……。

廃校になったあいりん小中学校

早川 あいりん小中学校は今でもあるのですか。

小柳 いや、なくなりました。理由は二つあって、ひとつは、戸籍がないとか住民票がないとかは子どもからの責任でないから地域の学校が引き受けるというふうには、大阪市の教育委員会も指導して、それがだんだん七〇年代の後半から根付いてきて普通の学校に入るようになったのがひとつと、もうひとつは、そういうことがあったので、八四年だったと思うのですが、在校生がゼロになったのです。二百人くらいは入れる校舎を建てたのですが、休校になって現在に至っています。学校関係の書類は全部地域の小中学校が預かっています。あいりん小中学校校舎は労働者の宿泊施設にしたので、建物そのものはあります。そこに碑があったところに何年から何年まで、あいりん小中学校があった記されています。あいりん小中学校卒業の名前で卒業者がものすごく差別を受けたのです。「お前、あいりん地区からか」と。それで、最後は、新しい校舎ができたときに、新いま宮小中学校と名前も変えたのです。

早川 今でも、ケースワーカーされていたときの生徒と連絡なんかはないのですか。

小柳 卒業生であるのはたった一人います。途中で親が亡くなったりして、いろんなことがあったのですが、たった一人年賀状をくれます。校舎がなくなつてから集まる所がないから同窓会ができないです。同窓会を何回かやっただけですけど、同窓会やったときは、うまく行った連

中は集まってくるのです。恥ずかしくないからと。でもやっぱり、そうじゃない人は学校にも来れない、同窓会にも来れない。お金がかかるわけではないんですけど、新しい校舎に集まってやろうと言ったときもいろいろ連絡したけれどやっぱり行かないわと言われました。子どもたちがそれをやろうと言ったときに、私たちも協力してやりましたが、そんな結果ですね。

寄せ場は変わる

参加者D 東京では山谷ですね、やっぱりそこらあたりでも同じような活動をされている人たちと横のつながりはあったのですか。

小柳 労働者間のつながりはよくありました。山谷から釜ヶ崎に来ている、釜ヶ崎から山谷に行くというように。たとえば長野のオリンピックは、釜ヶ崎から働きに行った人もいますけれど、山谷に行つてそこから働きに行くという形がありましたし、それから沖縄で海洋博のあった七五年なんかは、そこに釜ヶ崎から働きに行っています。だから、労働者同士は全国いろいろつながっています。労働運動をやっている人たちだけで年いっぱい集まっています。最近は少し低調ですが。

山谷もずいぶん変わってきたと聞きます。外国人が泊まる安いホテル街になったと。インターネットで見つけてやって来る。釜ヶ崎でも多いです。外国人がインターネットで見つけた地図を見ながら、大きな鞆を持ってうろろして宿を探している。ある、かつての簡易宿泊所は、

外国人専用の宿泊所になって中にインターネットの設備から何かからあります。そこに友達が泊まるというので案内したら外国語があふれていました。英語で案内が書いてある。そういうふうには、地域でも日雇いの労働者と同時に、外国人が泊まる安い宿泊所ができてきている。

参加者D それは働くために来ているのですか。

小柳 いや、単なる観光です。旅行者です。釜ヶ崎は関西空港から近いので、だいたい一時間くらいで来れますから、しかも安いので。他なら七、八千円の所が二千円くらいで泊まれますから。山谷もそのようになっています。

ボランティアと支援活動

早川 いま釜ヶ崎でボランティアやいろんな支援団体があると思います。が、どういう活動があるのですか。

小柳 一番大きいのは、「NPO釜ヶ崎支援機構」で、これはほとんど市の委託事業です。でき方は、労働組合運動から出てきたのですけれど、仕事は大きく分けて三つあり、一つ目は先ほど紹介した宿泊の管理事業、シェルターの管理運営を受け持っている。二つ目は、これが本流なんですけれど、特別清掃事業というのがあります。道路や釜ヶ崎の中の清掃、大阪市内の電話ボックスやバス停留所の掃除を一日何人ということをやっている。三番目は福祉相談。特別清掃事業は一日働いたら五千七百円もらえる。これは大阪市と大阪府が資金を出してやってい

るのですけれど、五十五歳以上の登録制になっていて、千三百人くらいいるうち、一日百人足らずの人に仕事がある。平均すれば、一人当たり一ヶ月に二回よくて三回くらいの仕事です。現金収入があるといつても、それ以外仕事がない人にしたなら、月に一万八千円の収入です。福祉は生活相談とか医療の相談などをしていて、そこから紹介されて大阪市の福祉事務所にいくことになるのですが、特に釜ヶ崎には釜ヶ崎のための福祉事務所があります。市立更生相談所というのですが、僕、この名前いやなんです。釜ヶ崎にいる人は、更生しなければならぬという位置付けです。日雇いの労働者というのはダメな人だから更生しなければならぬ。いわゆる更生施設というのは受刑者の入る所ですが、福祉事務所がそういう名前をつけているので、ずいぶん差別的だなと思っています。まあ、そういう所に相談に行く、それが大きなことです。

あとは、私たちがやっている釜ヶ崎のキリスト教協会というのは、カトリックとプロテスタントのグループが十一、あと個人でもやっています。いろいろな施設を持っています。老人のための、野宿者のための、それからアルコール依存症の人のための、それに地域には子どもがいますから子どものための、そういう施設。医療のグループもあります。スペイン語ができるシスターたちがいるので、スペイン語を話す人たちの支援や、あるいは英語を話せる人は英語を話す人たちの支援もしています。

労働組合は三つあって、全港湾西成分会、これが一番最初に出来た

グループで、一九六九年に結成。その後、その人たちがいろんな路線の違いで分かれて、釜ヶ崎日雇労働組合ができて、そこでまた考え方の違いで分かれて、釜ヶ崎地域合同労働組合ができた。三つの組合があります。日雇労働組合というのが、運動をやっていく中でNPOを作り先ほどの「NPO釜ヶ崎支援機構」を立ち上げました。あとNPOの医療活動をするグループがありますが、たとえば介護をするヘルパーのNPOとか、そういうのはたくさんあります。

行政の機関としては、「あいりん職安」という職業紹介所があり、これはいまだに職業を紹介しなくて、失業手当を払う職業紹介所です。それから、西成労働福祉センターというのがあつて、それは、職安が紹介しないから大阪府の外郭団体として仕事を紹介している所です。これも、今、不況でほとんど仕事を紹介できない。一九六一年の暴動のあとに医療が大切だということで、大阪市が外郭団体の「大阪社会医療センター付属病院」という病院を作つて、無料診療に近いことをしています。最近は生活保護の人が増えたから、無料でなくて生活保護の収入もあり、それなりにやっている。前は赤字でしたが、今も赤字ですけど、赤字の大きさは変わってきたと思います。若い人たちのグループは、コミュニケーションのために釜ヶ崎のすぐ近くに広場を作つて労働者と交流しているとか、いろんな文化活動も増えてきました。

あと、今すごく盛んなのは韓国系のキリスト教会です。毎日、朝晩集会をしています。昔は労働者の集会をやっていた所から、今や朝晩賛美歌が聞こえる。僕らが批判していたら、社会学を研究している若い友

達が、「小柳さん、そんなこと言うけどね、人生相談もやっているのだから排他的になったらいかん」と言われましたけれど。盛んといえば盛んです。キリスト教の集会をやったら、必ずその後には食事を出している。三十分か四十分集会をやったあと食事を出す。そういうパターンです。僕らはおなか为空いた人は行つたらいいと思うので、行つたら悪いとは全然思っていないけれど、それが話の長いグループがあつたのですね、六時ごろから九時ごろまで長くキリスト教の集会をして九時になつたら食パンを渡すというようなグループもあつたのです。ある人が、キリスト教というのは、話しを聞かないと飯食わさないのか言つたら(笑)、そのときから、一応食事だけに来る人にはパンを与えて希望者だけ話しを聞くということになつたのですが、話を聞いたらパンをやるわけでは(笑)。そういうキリスト教のグループもありました。あと、面白いのは、食事を出して一生懸命キリスト教の話をしたけれど、一人もキリスト教徒になると言わなかつたから、ここは効率が上がらないから引き上げるといつて引き上げていったグループもあります(笑)。四十年間関わっていたら、本当に様変わりしましたね。

故郷に帰ることが出来ない

参加者E 四十年間関わっておられてその中で、いわゆる日雇労働者ですね、その中には何かのきっかけで立ち直つた方というのは何人もいらつしやるのですか。

小柳 いますかといえ、います。たとえば、沖縄から来ていて最終的には帰つたらということで、そのとき旅費が足りないなら渡すとか。その逆もありますね、帰りたいと言つたのに家族が絶対受け付けません。その件は忘れられません。一緒に活動していたカトリックの神父がその家に電話をかけて話しをしていたのです。「本人がこういう気持ちだから、いままでやってきたことは悪いからそれを許して受け入れてください、本人に代わります」と言つて、本人に代わつた途端、がちやんと切つたのです。そして、それからものすごく荒れて、荒れて荒れて、せつかく自分は迷惑かけたことを謝つて生き方変えようと思つたのにと。そういう例もあります。なかなか故郷に帰るといふのは難しいですね。

これは友達がやつたケースですが、兄弟は何人かは成功しているのにその人だけうまくいかない。その人の家はすごいお金持ちなんです。釜ヶ崎で日雇い労働やつている者が、家に帰つてきたら家のものが恥ずかしいから、家に帰るとすぐにお金を渡し釜ヶ崎に帰れと言う。これなんかは金で解決している。

僕が出会つた件ですが、お兄さんが学校の教頭さんで弟さんは銀行の副支店長をしていて、釜ヶ崎にいるのはかつこ悪いから家に帰さんでくれと言われた。本人を受け入れられないのです。もういなくなつた人だと。本人が帰ろうと思つても受け入れられないということがあります。もうひとつ試みたこととしては、日雇い労働ができなくても農業ならいいだろうと、農村で再出発を試みたことがあります。ある協

力者のもとに、舞鶴のほうですが、農作業をして、そこでできたものを釜ヶ崎の炊き出しに提供しようとした。これも難しかったですね。相手の人は本当に一生懸命やつて、僕らも田んぼの時期に行きましたけれど、わざわざその人たちのために住む所まで造つてくれたのに、途中で空中分解してしまいました。

早川 そうすると、いろんな原因で釜ヶ崎にいつぱん入つた人はなかなか元に戻れないということですか。

小柳 それはわりと多いですね。極端に言えば死んでも帰れない。関西で言うと釜ヶ崎は非常に怖い所みたいな、そういう先入観、来てみたらそうでもないのですが、そういう風聞が非常にありますね。ですから、大阪なんかでも親はあそこに行つたらいかんと言っているようで、僕らがセミナーをやつたときも参加者の若い人は親の反対にあつたと言っていました。あそこは近づく所でない。僕も、中国の留学生が釜ヶ崎に来たいということで案内したことがあります。いろんなことを聞かされているのです。下宿のおばさんに、「そんな所は絶対行くな」と言われたと言っていました。あんな所ではどうなるか分からない。それでやつてきて帰りどうだつたと聞いたら、いや聞いていたのと全然違う、普通の人が住んでいる。そういう感想を持つたと言っていた。

参加者D 先生はキリスト教ですね、それでそういう関係で釜ヶ崎に入られたのですか。

小柳 ええと、先ほど言いましたように、四十年前に初めて行つたときは、紹介してくれた人はキリスト教の牧師だったけれど、キリスト教徒

として入ったわけではなくて、ケースワークをする人間として入った。その内に釜ヶ崎の中でいろんな活動があり、ここに本を持ってきました。これはキリスト教徒として働いていた人の四十年間の記録ですが、僕はケースワーカーを辞めてからその人たちのグループといっしょにやりました。だから最初から使命感を持って、キリスト教だからこういう所に行かなければならない、とかいうのがなかったから続いたのかなと思っています。

参加者D 先生たち以外のほかの宗教団体はそういう、応援するとか手伝いするとか、しているのですか。

小柳 天理教の教会があります。天理教は福祉活動はしていません。それから止恩学園というお寺の社会福祉グループがあつたのですが、それはやがて出て行きます。仏現寺というお寺もあつたのですが、区画整理のときに出てしまつて現在はありません。宗教団体で言えば、創価学会がかなりいろんな形で活動しています。選挙のときなんかも動いています。釜ヶ崎から一キロほど離れた所に救世軍があつてそれはかなり関わっているのですが、救世軍が私たちにいっしょにやろうと声をかけてきたときに、私たちは労働者といっしょにやると言ったら、「私たちは労働運動といっしょにはできません」と言われた。それ以来いっしょにやつていませんけれど、そういう形で古くから関わっていたことがあります。

中にあるのは今のところ、天理教の教会がひとつと、キリスト教の施設は六つほどあります。ありすぎですけどね。労働者に言われたこ

とがあります、お前から来るから釜ヶ崎が悪くなったと(笑)。わしらはわしらでできるのに、お前らが世話するから悪くなったのだ。天理教は見たところ何もやっていません。新しく来たキリスト教のグループは、ある意味での布教ですね、キリスト教の集いを朝晩やっています。去年だつたと思うのですが、びっくりしたのですが、いままでクリスマスに街の中をキリスト教の賛美歌を歌つて車が走ることはなかったのに、去年あたりから車が走るのですよ。そのくらい、いい悪いは別にして堂々とやっています。

釜ヶ崎のいま、そしてこれから

参加者A どういう方が釜ヶ崎に入つてこられるのですか。

小柳 今、釜ヶ崎に来ているのは、釜ヶ崎に来たら生活保護が受けられると聞いて入つてきていますね。ネットカフェの難民といわれている人たちは釜ヶ崎の存在をほとんど知らないだろうと思うのです。ネットカフェで一日千円で泊まれるのであつたなら、もつと安い所があるよ、一部屋ちゃんと寝る所あるよ、というようなことを知らない人たちが多いと思います。以前は、失業して大阪に来て、どっかの飯場で働いていた釜ヶ崎のことを知った。たとえば、駅手配で来たなら八千円なのに、釜ヶ崎から来たなら一万二千円というのが分かつて、その飯場を出て釜ヶ崎に行つてそこから働きに出るといふように、以前は失業して釜ヶ崎に来たという人が多かつたです。広島で働いていて釜ヶ崎まで来たとか、

何段階か踏んで釜ヶ崎まで来た人が多かったですが、今は、労働者として入ってくるよりも、生活保護で入ってくる人がいます。基本的には失業して入ってくるということが一番大きいと思います。

なぜそうなってきたかという点、土木や建築の仕事がなくなつたわけではないのです、手配の方式が変わつてきたのです、労働者を集める方式が変わつてきたのです。今や携帯電話なのです。たとえば今までは朝早く、三時とか四時に大きなマイクロバスが飯場から迎えに来て、そこに労働者を集めて連れて行つた。今はそうではなくて、一回仕事に行つたところが、明日あんたの携帯電話に、どこに行きなさい、どこに行つたらバスが迎えに行くよと連絡を入れるので、釜ヶ崎で生活しなくても日雇い労働できるようになった。

若い人たちはそういうふうにして日雇い労働に行つている。それからもうひとつは、今までは雇用形態として毎日違う人を雇つていた。しかし、賃金を払う人は、手配師がいみじくも言いましたが、我々は社会福祉をやつているのでない、建築業をやつていなのだ、だから均一の仕事で休まない人が欲しいとなる。今までは俺二日働いたからあとの一日はお前行けというように交代で行つていたのが、その場合Aが一万三千円もらつていたらBも一万三千円もらつていたのですが、今はBの方が年取つていたらいらぬ、Aの方にずっと来て欲しいとなつてしまつた。

仕事がまったくなくなつたわけではないのですが、雇用の形態が変わつてきた。だから携帯電話がないと仕事にも就けない。その携帯電話を取るのがまた難しく、住民票がないといけない。一昨年(二〇〇七年)

の選挙のときに、住民票登録二〇八八人が消されて、免許証は取れないわ、携帯電話は更新できないわ、で大騒ぎになつたのです。住所があるということはすごく大きなことです。それまでは、ある労働組合の事務所に住民票を置かせていたのですが、大阪の市議会の問題になつてそれは認められないとなつた。二十年近く黙認していたのに、ある日突然だめだといわれ住民票がなくなつたのです。とても苦勞があり、住民票を持つことが大切なことであるとしみじみ感じています。

早川 あと話は尽きないともいますが、時間が来ましたのでこの辺で終了したいと思います。拍手で感謝の意を表したいと思います(拍手)。

資料

一・参加者(十三名)

井尾雅己、小川宗一、門野幸己、塩野靖男、嶋田利裕、田歌昇、中野岩二郎、早川真理子、宮前健二、森本小夜美、山口孝志、

二・発言者

A(三十代、男性)、B(五十代、女性)、C(六十代、男性)、
D(七十代、男性)、E(六十代、男性)

